

西田幾多郎

2019 年本試

問 8 「無の場所(絶対無)」を論じた西田幾多郎についての説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

27

- ① すべての意識や実在の根底に「無の場所」を考え、「無の場所」の限定である現実の世界においては、様々な事物や事象が絶対的な矛盾や対立を残したまま、統一されていると説いた。
- ② 西洋哲学における伝統的な二元的思考に基づいて、主観により生じる「無の場所」を否定し、現実世界においては、様々な事物や事象が絶対的な矛盾や対立を残したまま、統一されていると説いた。
- ③ すべての意識や実在の根底に「無の場所」を考え、「無の場所」の限定である現実の世界においては、様々な事物や事象の間にいかなる矛盾も対立も存在しないと説いた。
- ④ 西洋哲学における伝統的な二元的思考に基づいて、主観により生じる「無の場所」を否定し、現実世界においては、様々な事物や事象の間にいかなる矛盾も対立も存在しないと説いた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 3 問	問 8	27	①	3

2016 年本試

問 8 次のア～ウのうち、西田の説く純粹経験に当てはまる事例として適切なものはどれか。その組合せとして最も適当なものを、下の①～⑦のうちから一つ選べ。

27

ア Aさんは、合唱をしているうちに、自分の歌声の音程がずれていることに気づき、隣りの人の声に合わせてながら歌った。

イ Bさんは、鏡を見ながら自画像を描いているうちに、自分の姿を描いていることも忘れて、筆を動かし続けた。

ウ Cさんは、幼少期のアルバムを眺めているうちに、今はもう忘れていたが、自分にもこういう無垢なころがあったのだと思い至った。

① ア

② イ

③ ウ

④ アとイ

⑤ アとウ

⑥ イとウ

⑦ アとイとウ

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第3問	問8	27	②	3

2013 年本試

問 8 次の文章は、『善の研究』から始まる西田幾多郎の哲学的思索の展開について述べたものである。□ a □ ～ □ c □ に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。 □ 28 □

純粹経験とは、□ a □ の状態で成立するものであるが、純粹経験からすべてを説明するためには、□ a □ だけではなく、主観と客観の分化を論理的に基礎づける必要がある。そのために彼は、主客の根底を問うて、主観と客観を成立させると同時にそれを包む「□ b □」の論理を求めた。西田によれば、「□ b □」の論理は、有と無の対立を超えて、事物事象そのものを可能にする「□ c □」に基づくものであった。

- ① a 主客未分 b 空 c 絶対無
- ② a 主客未分 b 場 所 c 絶対無
- ③ a 主客未分 b 存 在 c 絶対他力
- ④ a 主客未分 b 場 所 c 無 我
- ⑤ a 主客対立 b 存 在 c 絶対他力
- ⑥ a 主客対立 b 空 c 絶対他力
- ⑦ a 主客対立 b 場 所 c 絶対無
- ⑧ a 主客対立 b 空 c 無 我

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 3 問	問 8	28	②	3

2010 年追試

問 7 A, B, C, D の 4 人の経験のうち、純粋経験の具体例として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

20

- ① コンサートに出かけた A さんは、オーケストラの見事な演奏に心を奪われて、自分が空腹であったこともすっかり忘れていた。
- ② 将棋好きの B さんは、公開対局でプロ棋士の一心不乱に考える姿を ^{なま}生で見ると、対局会場まで夢中で駆けつけた ^{かひ}甲斐があったと喜んだ。
- ③ 登山家の C さんは、難コースといわれる ^{だんが}断崖を登っていたが、途中から自分で自分の体をどう動かしたのか意識せず最後まで登りきっていた。
- ④ 読書好きの D さんは、クライマックスに差し掛かった長編小説を読むことに没頭していたため、電話の鳴る音に全く気づかなかった。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 3 問	問 7	20	②	3

2006 年本試

問 7 「純粋経験」の具体例として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ
選べ。

20

- ① コンサートに出かけた A さんは、長年 ^{あこが} れていた歌手の歌を今自分が ^{なま} 生
で聴いているのだと思い、改めて喜びをかみしめた。
- ② 数学の好きな B さんは、母親が用意してくれた夜食を食べることも忘れて、
数学の問題を解くのに夢中になった。
- ③ 天才画家と呼ばれる C さんは、風景画の制作に没頭したが、それはあたか
も風景の方が彼を突き動かして描かせているかのようだった。
- ④ 赤ん坊の D ちゃんは、お ^{なか} 腹 ^す が 空 いたのか甘えたかったのか分からない
が、母親の胸に抱かれながら一心不乱に母乳を飲んでいた。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 3 問	問 7	20	①	3